

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.74 (秋号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

2018年10月15日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

アサギマダラマーキングの報告

松崎まみ

9月2日 天候：晴れ 参加者：20名

当日は雨の心配も無く、3組の子ども連れファミリーも参加し、予定通り行う事ができました。アサギマダラをマーキングする前に小日和田のクロツバラ植栽地に立ち寄り、無事に根付いているか、確認に行きました。クロツバラの周りはマツムシソウやオミナエシ等の花々が咲き乱れ、5月の石ころだらけの地面は跡形も無く素晴らしい秋の野原に一変していました。日も射ってきてチョウも蜜を求め花々の間を飛び交っていました。



次に鈴蘭峠に移動しましたが、ヨツバヒヨドリの花はほとんどが終わっておりドライフラワー状態でアサギマダラの姿を探しても見つかりません。事前に何度も現地足を運んで下さった指導者の鈴木さんの話によると、今年はアサギマダラは高い所を飛んでいて、子どもたちが捕獲するのは難しいだろうとの事でした。

そのため、鈴木さんが前もって捕獲しハチミツ等を与えて生かしておいてくれた23頭(♂21、♀2)を、子どもたちに渡しオス・メスの違い、マーキングの仕方等を、宝田さんに指導していただきました。初めてアサギマダラを手にした子どもたちはマーキング後「元気に飛んでって!!」と放蝶しました。

チャオのスキー場に移動し昼食をとる頃には日も射ってきて、アサギマダラもわずかに姿を見せ、大人も子どもたちも網を持って走り回り、運良くゲットできた子どもは大喜び。中には虫かごにバッタや石ころをせっせと入れている子もいましたが。

ヤナギランやトリカブト、マツムシソウ、アサギマダラがよく集まるサラシナショウマなども花盛りでしたが、肝心のアサギマダラがなかなか現れず、例年のようにはあちこちで歓声上がる事はありませんでした。

※9月16日、タカの渡りの観察会（多くのタカが渡って行くのが見られた）にチャオを再訪した時も、マーキングに参加した子連れファミリー2組がやはり来ていて、網はもちろん持参。アサギマダラが姿を見せると原っぱを走り回っていました。

アサギマダラ

鈴木さん事前捕獲 23頭（♂21 ♀2）
チャオスキー場で捕獲 1頭（♂）
今年は未だに再捕獲情報が無い（2018.10.10 現在）

当日確認したその他のチョウ

小日和田 キタキチョウ、アカタテハ♂、イチモンジセセリ、ギンボシヒョウモン
チャオ モンキチョウ、モンシロチョウ、シジミチョウの仲間

確認した鳥

トビ1、ノスリ10、イワツバメ20、ツバメ1、ハシブトガラス1、ホシガラス2、
メボソムシクイ5～6、ウグイス4～5、キジバト2、ホオジロ、カケス1、
エナガ・シジュウカラ・ヤマガラ（合わせて約15）



飛騨の峠【その2】

木下喜代男

幻の笈破集落と牧坂峠

峠の国飛騨には、他国へ通じる越中、江戸などの主要街道のほか、集落間を結ぶ小さな峠も数多くあった。近代になって主要街道のほとんどが自動車道に変わったが、村にある小さな峠道は、歩いての通学や買い物など、日常生活のために遅くまで残っていた。やがてそれらも役目を終えてヤブに埋もれ、今では人々からも忘れられてしまっている。今回はそんな峠の一つを紹介したい。

さて、飛騨人でも「笈破」という地名を聞いた方は少ないのではなかろうか。これは「おいわれ」と読み、かつて神岡町の北部、高原川右岸標高約



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

900mの山中にあった集落の名だ。ここには昔から8戸が住んでおられたが、昭和30年代から順次神岡の町などへ出てしまわれ、昭和の終わりには廃村になってしまった。国土地理院地形図の5万分の1「有峰湖」にはまだその名があるが、2万5千分の1の「鹿間」からは消えている。

かつてこの笈破集落へ行くには、高原川右岸を通る越中東街道（現国道41号線）ぞいの**牧集落**から山道を登るのがいちばん近かった。あと東の山野村伊西集落から峠（笈破側では伊西峠、山野村側では笈破峠と呼んだ）を越えるか、南の神岡鉦山前平から蛇腹峠を越え、長駆歩くしかなかった。廃村になった現在も入りにくい状況は変わらず、南側から敷設された林道があるものの、鉦山や森林管理署の専用道路なので一般車は入れない。

筆者は以前からこの山中の集落のことが気になっていたが、毎年新緑の頃に元村民の方が祭礼のために入られることを知って、今年頼んで同行させてもらった。

今年は元村民の方やその知人など20名くらいが参加された。神岡の町から軽四輪車を連れ、山野村へ通じる県道を登る。途中から二十五山の鉦山専用林道に入り、山中の未舗装の悪路を7kmほど走ると、突然平地が現れた。地形はまさに隠れ里であった。昔は気候が温暖で米作も行われていたというが、今は一面の草原に還り、家の礎石が残っているだけだった。（写真1）

皆さんが神社（写真2・3）で祭礼をやっておられる間、筆者は山野村伊西へ通じる峠道の探索に入ったが、笹などの深いヤブに没してかつての道の形状が見当たらなかった。途中尾根を間違えたりして2時間半ほどヤブを漕いで悪戦苦闘したが、あきらめて集合場所へ戻った。

その頃皆さんは昼食を終えて山菜取りに出かけ、老人たちが残っておられただけだった。91歳のMさんはまだしっかりしておられ、ここでの往時の生活のことをなつかしみながらいろいろ話していただいた。そして高原川沿いの牧集落へ下る峠道を教わった。この道だけは今も牧から登って時々手入れがなされているとのこと。

住宅の石垣前を西へ少し歩くと、村人が「牧坂峠」と呼んでいた小さな峠（写真4）があり、ここから道は下りになる。少し下ったところの杉の大木の根

元に祠があり、地藏様、馬頭観音様がおられた。(写真5・6・7) 子供たちはこの道を通って下の漆山集落にある学校へ通ったというが、標高差は600mもあり、往復がたいへんだったと思われる。子供たちは、学校の行き帰りにここの地藏様に小さな手を合わせたのであろう。



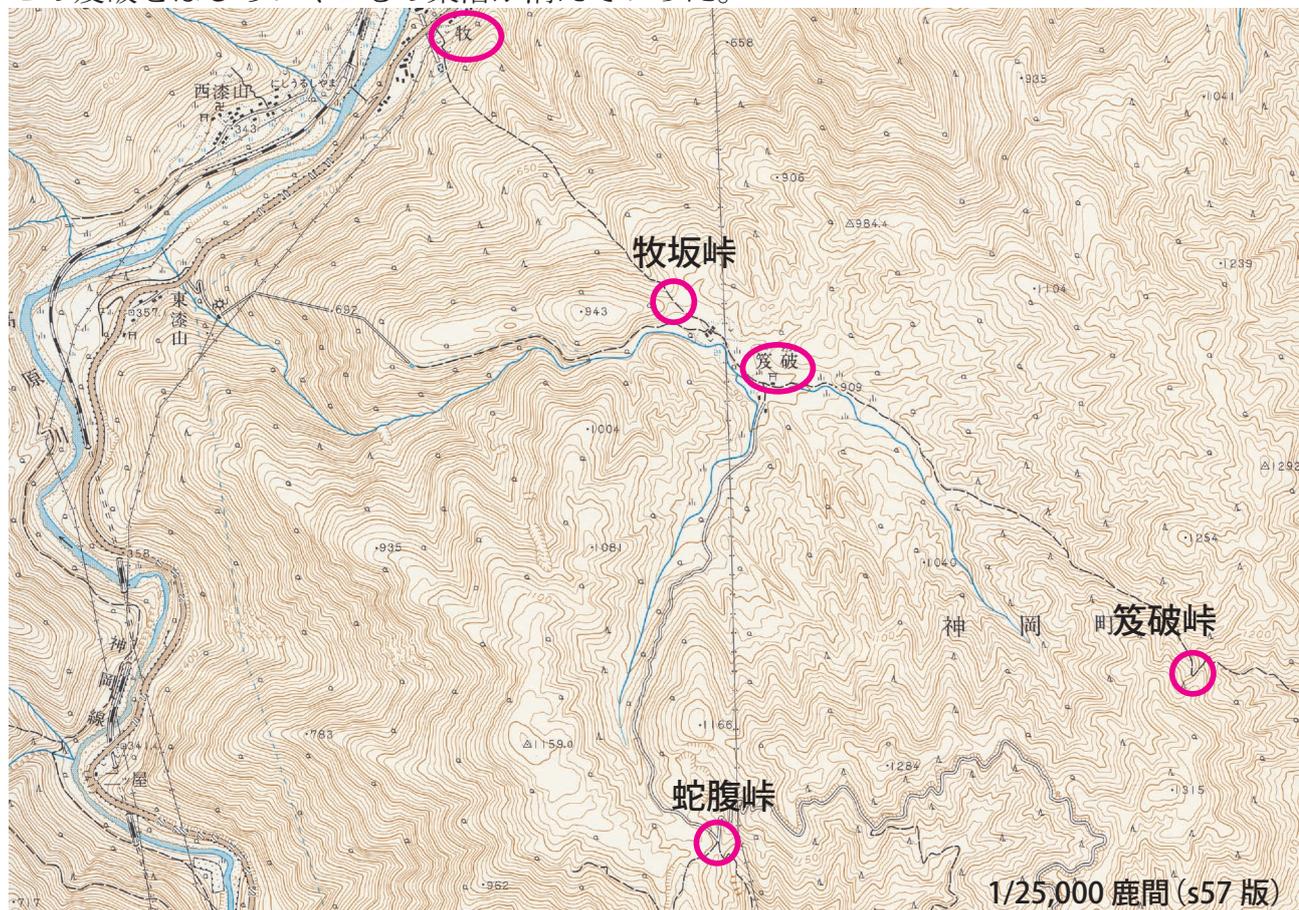
このような小さな峠は、集落によって呼び名がちがうことがままある。この峠も別名カンジャ峠ともいわれている。また『斐太後風土記』では「笈破嶺」となっており、「東漆山村、牧村から笈破村へ」との説明がある。このため、山野村の伊西と笈破を結ぶ峠と混同され、紛らわしい。

「歩く民俗学者」といわれた宮本常一の著書に『山と日本人』というのがあり、日本には「山岳民」なるものが存在したという話がでてくる。

「日本の標高800mから1000mくらいの山岳地帯には、水田耕作をする平地民とはちがう、焼畑耕作にはじまる畑作を中心とする文化をもった山岳民と呼ばれる民族が存在した。たとえば九州の米良(めら)、椎葉、諸塚、五木、近畿では吉野の天ノ川、大塔、十津川、長野県伊那の下栗など」というもの。

この説は柳田国男の「山人」を意識して書かれたとも言われるが、山岳民は縄文文化の系譜を継ぐものだと言っている。山国の飛騨にはかつてそのような集落がたくさんあったし、今も残っている。そしてそこには、自然のなかで長年の暮らしが育んだ美しい景観がある。

もともと山と里の生活には優劣がなく、豊かな自然の中での自給自足の時代はよかったが、近代文明の恩恵に浴するようになるとしだいに「地形的に不便」ということになり、この笈破をはじめいくつもの集落が消えていった。



前出の M さんの奥さんが隣の山野村から嫁いできたとき、歩いて越えたのが笈破峠（伊西峠）だと聞いた。今回はヤブに阻まれ到達できなかったのも、こんどは山野村の伊西側から探して見ようと思う。花嫁が越えた峠には、今も石仏が残っておられるはずだという。
(現地調査：平成 30 年 5 月 6 日)

水生昆虫調査（第 3 回目）

松崎茂

参加者：10 名 天候：晴れ

昨年、一昨年に引き続き今夏も 7 月 22 日に水生昆虫の調査を実施した。今年は冬から春にかけて宮川では松本橋下流で大規模な河川工事が行われ河床が下がってしまい、調査の適地が無くなったため、川上川でのみ調査を行った。

赤保木の市民プール駐車場に集合し、さっそくプール横の川に入って調査を行った。しかし、川に入って礫をひっくり返して水生昆虫を採取し始めて愕然。カゲロウやカワゲラは皆無、何時でもこれだけは見られるゴムシ（ヒゲナガカワトビケラ）さえも見つけるのがやっと。水生昆虫はどこへ行った？状態。50cm × 50cm の



範囲にいる水生昆虫を調査するのが基本だが、今回はこれを無視して手当たり次第に居そうな場所の礫をひっくり返したがだめ。しかたが無いので上流の新北野橋下流に移動して、やはり 50cm × 50cm の範囲は無視して再調査をすると、さすがにここにはいた。しかし、7 種類見つけただけ。個体数はここも少ない。

蒸し暑い夜、橋の照明の明かりが柱のように見えるカゲロウの乱舞が見られなくなってから、もう何年になるだろう。真夏の夜にせせらぎ街道などで車を走らせると、ヘッドライトの照明に無数の虫たちが浮かび上がり、車の前面にはびっしり死骸がへばりついてたが、今はそれも少なくなった。こういった現象から水生昆虫の数が激減したのも頷けるが、では虫が減ってしまった根本の原因は・・・？

7 月 22 日調査結果

川上川市民プール横

- ・ヒゲナガカワトビケラ
- ・ウルマーシマトビケラ
- ・コカゲロウ sp

川上川新北野橋下流

- ・ヒゲナガカワトビケラ
- ・ウルマーシマトビケラ
- ・モンカワゲラ
- ・コカゲロウ sp
- ・キイロヒラタカゲロウ
- ・ミヤマタニガワカゲロウ
- ・マエキフタツメカワゲラモドキ



モンカワゲラ

今年5月にクロツバラの植栽事業に協力しましたが、呼びかけて下さった鈴木俊文さんから報告の文書が届きましたので、鈴木さんの許しを得てここに掲載します。

関係各位

今年は猛暑・豪雨・台風など次々自然災害があり、被害に遭われた方には心よりお見舞い申し上げます。

5月13日は高山市高根町小日和田でクロツバラの植栽にご協力いただき有り難うございました。活着しないと枯れる恐れがあるので水やりをしないといけないことや、卵・幼虫・成虫の確認のため9月までに15回現地に行きました。枝の一部が枯れた木はありましたが、猛暑が続いたにもかかわらず植栽されたクロツバラ本体が枯れたものはありませんでした。残念ながらヤマキチョウの卵・幼虫・成虫は確認できませんでした。例年なら普通に見られるスジボソヤマキチョウは幼虫1頭と1♂しか目撃できませんでした。チョウの発生には多い年と少ない年があるのですが、今年は猛暑などの気象条件も加味してたまたま少ない年に当たった可能性も考えられます。

開田高原には3回調査に行きました。スジボソヤマキチョウいくつか見ましたが、ヤマキチョウは1♂だけしか目撃出来ませんでした。撮影はできました。ほかの産地の情報はまだ聞いていないので分かりませんが、高根町と開田高原では *Gonepteryx* (ヤマキチョウ属) は不作だったと言えます。

来年以降は葉も枝も伸ばし今までより多くの匂いが拡散するので、ヤマキチョウが産卵することを期待しています。近くにお越しの際は覗いていただいで確認していただけたら有難いです。

飛騨地方はもとよりヤマキチョウは各地で減少しており東北地方では絶滅したと考えられています。これからも高根町のヤマキチョウの発生状況を見守っていきたいと思っています。

会の行事は10月20日に行われるギフチョウ生息地の下草刈りと検討会議を残すのみになりました。今年もあと2か月余りとなりましたが、風邪や怪我などされないようにお身体おいたわり下さい。

2018年10月7日

ギフチョウの翔ぶ里山の自然を考える会
鈴木俊文

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人2,000円 家族3,000円 団体5,000円
あなたの知人、友人に入会をおすすめください
・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第74号(秋号) 201年10月15日発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL: 0577-32-7206・FAX: 0577-32-7207

下記URLのページからくらがね通信のバックナンバーが閲覧できます。

★ <http://iidalaw.net/norikura.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者: 松崎 茂

E-mail: ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL: 0577-34-4703

表紙写真提供: 小池 潜

印刷: 山都印刷